＜前回＞オリエンテーション

後期：キリスト教と経済・環境

後期オリエンテーション

３．自然神学の拡張と社会科学

３－１：自然神学とは何か

３－２：自然神学と社会科学

３－３：自然神学の規範的場としての聖書解釈

４．キリスト教思想と経済・環境

４－１：キリスト教思想から見た環境と経済

４－２：聖書と環境思想

　１：創造論から終末論へ

　２：社会的構想力――モデル、ヴィジョン　11/13

　３：エコ・フェミニズム　11/20

４－３：聖書と経済思想

　１：経済神学と聖書　11/27

　２：契約思想の射程　12/4

　３：イエス、パウロ、黙示論　12/11

　４：賀川豊彦とキリスト教社会主義　12/18

４－４：現代神学の動向から　12/25, 1/8,22

　１：プロセス神学

　２：政治神学

　３：科学技術の神学

＜前回＞キリスト教思想から見た環境と経済

「環境と経済」：社会的なもの＝家

・現在の二つの危機は連動している。経済危機と環境危機

過剰な自由主義のもたらしたもの

・「政治的なもの」の復権とその課題

（１）John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, and the Economy*, State University Press of New York Press, 2002.

（２）John B. Cobb, Jr., Christianity, Economics, and Ecology, in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether（eds.）, *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.

１．新しいコンセンサスと現状

①状況（497/1,2）

・人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス

・現実にはほとんど変化を生じていない。

③技術／経済／エコロジー（499/2,3,4,5）

・科学技術は、経済とエコロジーを多様な仕方で関連づける

economy（oikos + nomos）/ ecology（oikos + logos）

しかし、これらはまったく独立的に発展してきたのであり、最近まで関係性はほとんど考えられてこなかった。現在はむしろしばしば対立的に見られる。

２．キリスト教の問題性と課題

①キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか（499/6-501/1）

・科学技術は貧困を縮小する（必要なものを生産し雇用を創出する＝豊かにする）

・キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性（物質的な必要を満たすという目標の共有）

・人口増加・人口爆発（伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視）
医学の進歩、人間の生命を救うことは、我々の遺産・魂に深く根ざしている
②自然世界の保持へのコミットメントをはっきりと表現すること(501/2-503/1)
・科学技術のあり方の転換
・古代キリスト教の徳の復興
　他者（地球に共に生きる生きた被造物すべて）の幸福のために自分を犠牲にする
　　→ 消費者志向社会からの撤退
　すでに富裕である者は収入や財産の増加を進んで際し控えること。収入と富の再分配についての公共政策の支持。
３．政策レベルの問題とキリスト教
①税政策の転換(503/2-504/2)
・逆進的な税や給与税から資源税・汚染税へ
・建築や改築を無税に土地にのみ税を課す、土地投機を抑制し、有効利用を促進する土地の利益は共同体全体に属している（ヘンリー・ジョージ）
②税と予算による人口増加への抑制効果（歳入歳出政策）(504/3,4)
４．経済成長とキリスト教
５．キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係
①キリスト教共同体内での必要性(506/7-507/3)
　地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること
　→ 神学の悔い改め：人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考えることによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情における、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復
②元来の意味に従って、経済とエコロジーとの連関を見直すこと(507/4-508/6)
　家全体（人間とその他者）の研究、この家を秩序づける規則、現実の経済活動がこの規則に合致すること。エコロジーの基盤に立って、経済理論を再考すること（現代経済学の成果の放棄ではなく)、これには前提におけるいくつかの深い転換が要求される
・経済的人間を共同体における人格として再考すること
・経済的人間をその部分とする共同体は人間に限定できない
・共同体は未来へと広がっている
・共同体のメンバー（人間も非人間も）は他者に対する価値とそれ固有の価値とを持つ
・被造物の多様性は人間にとって重要な美的価値を増し加える
・科学技術をエコロジカルな仕方で適切なものとすること
・神はすべての被造物に配慮している
６．グローバル化における経済と政治(508/7-510/1)
７．キリスト教―失敗と課題―(510/2,3)
①「われわれ西洋のキリスト教徒」(510/2)
　信仰は愛の純粋に個人主義的な表現を越えて社会分析、社会倫理へと進むことを要求する。しかし、失望がある。環境危機への責任は主張されたが、ほとんど手つかずである。
②新しいヴィジョンを求めて(510/3)
　われわれの失敗は、キリスト教信仰本来のものから帰結ではない。それは、むしろ、過去２世紀を特徴づけてきた思惟の分裂の進行を我々が受け容れてきたことの帰結である。いわゆる「専門家」を恐れすぎ彼らの前提を吟味するのに控えめすぎた。一切のものは相互に連関し合っており、エコロジーと経済学との区分を突破する機会と責任がある。
　この惑星における人間の存在の仕方（持続可能なだけでなく、再生的な）へと社会全体を向かわせ得る新しいヴィジョンを提供するように求められている。
８．政治の復権とキリスト教の責任

↓

（３）まとめ

・環境と経済・政治とは一つの問題系を構成している。キリスト教思想研究は、問題系の再確認から議論を再構築する必要がある。そのための基礎理論としての自然神学の再考。

倫理的設定では射程が狭い。カブが示す程度の諸領域が問題となる。

・キリスト教思想の根本へ、そこからから議論を構築すること。つまり、聖書解釈が争点となる。

４．キリスト教思想と経済・環境

４―２：聖書と環境思想

１：創造論から終末論へ

（０）環境論的神学と創造論――基礎的議論

１．環境倫理の諸問題と平等の原理　　cf.　生命倫理

自然の生存権／世代間倫理／地球全体主義

２．リン・ホワイトの問題提起：聖書は人間中心主義か？

「地の支配」とは？　→　論争：パスモア、モルトマン、リートケ

３．支配と王権イメージ

暴君的な専制君主（王は地上における神の代理）、諸部族の調停者（首位の貴族）

４．人間の固有の使命としての支配、「地の僕」との相捕性　→　人間は何者か？

エデンの園の管理者・園丁、種の間の利害の調停者

５．「善悪の知識の木の実」を食べたことがもたらした結果としての地の搾取・破壊

カインとアベルの対立そして殺人、ノアの洪水

人間と自然との連帯性（グローバル化の意味）

６．自然との関係をめぐる近代以前と以後における質的差異

７．西洋がだめなら東洋、近代がだめなら近代以前、これで問題は解決するか？

アニミズムは世界を救うか？

科学技術と議論がかみ合うかという問題（対話可能性）、環境危機は近代世界の問題である。

８．自然との共生のための前提

・欲望のコントロール（欲望の無制限の肯定でも、欲望の完全否定でもなく）

理論だけでなく、感性が問われている。

・正義と対話の精神　→　正義の基準自体が「対話」において明らかにされる。

・共に生きる世界のヴィジョンの共有　→　希望の組織化（髙木仁三郎『市民科学者として生きる』岩波新書）

＜創世記１＞27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

＜創世記２＞7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

18 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

19 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。

＜創世記９＞9 「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10 あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。

＜サムエル上　８＞4 イスラエルの長老は全員集まり、ラマのサムエルのもとに来て、5 彼に申し入れた。「あなたは既に年を取られ、息子たちはあなたの道を歩んでいません。今こそ、ほかのすべての国々のように、我々のために裁きを行う王を立ててください。」6 裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った。

＜イザヤ１１＞6 狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。

＜参考文献＞

１．加藤尚武　　『現代を読み解く倫理学』丸善ライブラリー。
２．富坂キリスト教センター編　『エコロジーとキリスト教』新教出版社。
３．岡本裕一朗　『異議あり！　生命・環境倫理学』ナカニシヤ書店。
４．栗林輝夫編　『現代キリスト教倫理４　世界に生きる』日本基督教団出版局。
５．並木浩一　　『旧約聖書における文化と人間』教文館。
６．芦名定道　　『自然神学再考　近代世界とキリスト教』晃洋書房。
７．ドネラ・Ｈ・メドウズ他　『限界を超えて』ダイヤモンド社。

（１）**Dieter T. Hessel, Rosemary Radford Ruether,**
Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans, Harvard University Press, 2000.
Preface（Lawrence E. Sullivan）
Series Forword（Mary Evelyn Tucker and John Grim）
Introduction: Current Thought on Christianity and Ecology（Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether）

I. Creator, Christ, and Spirit in Ecological Perspective
・Losing and Finding Creation in the Christian Tradition（Elizabeth A. Johnson）
Response to Elizabeth A. Johnson（Gordon D. Kaufman）
・An Ecological Christianity: Does Christianity Have It?（Sallie McFague）
Response to Sallie McFague（Kwok Pui-lan）
・The Wounded Spirit as the Basis for Hope in an Age of Radical Ecology（Mark I. Wallace）
Response to Mark I. Wallace: Another View of the Spirit's Work（Eleanor Rae）
・The World of the Icon and Creation: An Orthodox Perspective on Ecology and Pneumatology（John Chyssavgis）
・Ecofeminism: The Challenge to Theology（Rosemary Radford Ruether）
Response to Rosemary Radford Ruether: Ecofeminism and Theology --- Challenges, Confrontations, and Reconstructions（Heather Eaton）

II. Vision, Vocation, and Virtues for the Earth Community

・Christianity's Role in the Earth Project（Thomas Berry）
・The Human Vocation: Origins and Transformations in Christian Traditions（Theodore Hiebert）
・Christian Ecological Virtue Ethics: Transforming a Tradition（Louke van Wensveen）
　Response to Louke van Wensveen: A Constructive Proposal（Steven Bouma-Prediger）
・No More Sea: The Lost Chaos of the Eschaton（Catherine Keller）
　Response to Catherine Keller（Mary Ann Hinsdale）
・River of Life in God's New Jerusalem: An Eschatological Vision for Earth's Future（Barbara R. Rossing）
　↓
「創造論から終末論へ」: 1960 ～ 80 年代→1980年代以降
　Q1:聖書・キリスト教は環境破壊の原因か。両者の関連性はいかなるものか。
　Q2:聖書・キリスト教は環境破壊の克服にいかに貢献するか。

（２）聖書の創造論と環境：ヒーバート

１．Theodore Hiebert, *The Yahwist's Landscape. Nature and Religion in Early Israel*, Oxfor University Press, 1996.
　http://mccormick.edu/instructor/hiebert-theodore

２．The Human Vocation: Origins and Transformations in Christian Traditions（pp.135-154）

旧約聖書のいわゆる二つの創造物語についての旧約学的研究に基づいて、まず、そこに現れた「人間の使命」（この世界・自然界における人間の使命）についての二つの像・見解・思想を明確化した上で、その使命の理解がキリスト教思想史においてどのように展開したかを概観する。

その上で、現代の環境危機に直面した状況での人間の使命を考える上で、聖書が提示する人間の使命のイメージがいかなる意義を有するかについて議論を行っている。

聖書の創造論に直接関わる部分のポイントは以下の通りである。

(1)創造物語における人間の使命の二つのイメージ(pp.135-141)

・ヒーバートは、創世記第一章(1.1-2.4a)の第一創造物語をＰ資料、創世記第二章(2.4b-3.24)の第二創造物語をＪ資料とする資料仮説に依拠し、それぞれの資料の背景に、それを伝承する社会層（社会的文脈・歴史的文脈）を想定する。Ｐ資料は、古代イスラエルの祭司共同体に関連し、古代イスラエル王権を背景とする。それに対して、Ｊ資料は、古代地中海高地の農民層の経験と結びついている。
・Ｐ資料が描く人間の使命は、「支配」(dominion)という言葉（ラーダ、カーバシュ)、また「神の像」という思想において表明されている。これは、古代オリエントの王権イデオロギー(その思想的担い手としての祭司あるいは神官)の枠組みの中に位置しており、自然界における人間の独自な機能を認める点に特徴がある。人間の大地に対する関係は、祭司が社会において果たす役割に対応づけられる。
・Ｊ資料の描く人間の使命は、Ｐとは対照的である。人間の原型は、エデンの園を耕す農夫であり、アダム、アダマという用語において示される。つまり、これらは耕作可能な表土であるアーパールに由来し、したがって、正確には、「農夫」と「農地」と訳しうると言われる。ここにおける人間の特徴は、他の動物との連帯・運命の共有という点に認められる。土、命の息という生きた人間の基盤は、動物も共有する（Gen.7:22)。人間の使命は、「耕す」（アーバド）ことであり、それは、「使える」「奉仕する」という大地への従属性において描かれる。
・以上の二つの対照的な人間の使命の理解は、相互に著しい対照をなしつつも、旧約聖書テクストの様々な箇所の連関しつつ、展開されている。

(2)キリスト教神学における変容(pp.141-143)

・二つの人間の使命を調和させる試みは古代キリスト教思想おいて開始されている。その際に新たに取り入れられたのが、古代プラトニズムの観念論（精神・魂と身体・物質の

二元論）であり、それは、オリゲネス、アウグスティヌスにおいて明確に確認され、中世のトマスに継承される。
・この思想史的系譜では、「支配」（人間の固有性）を基盤し、それに「奉仕」（人間の連帯性）を組み入れるという仕方での調和が試みられており、それは、「キリスト教における最も一般的な遺産」となった。
・この系譜に対抗する要素を含む思想家（ベネディクトゥス、フランチェスコら）においても、支配を基調とした人間の使命の理解は、前提となっている。これは、たとえば、エーミル・ブルンナーなど現代の神学者においても同様である。
３．現代キリスト教神学における変容(pp.143-149)
・「キリスト教における最も一般的な遺産」は持続的な力を有している。しかし、様々な実例が示すように、「支配」は、「スチュワードシップ」(stewardship)という変容を受けている。つまり、人間の使命は、「神をイメージすること」(the imaging of God(Dominus))であり、それは、「スチュワードの支配を行使すること」を意味する（145)。支配は基調であるが、支配は、「配慮する」(care for)という点で、Ｊ資料的な視点を組み入れている。
・現代の環境論・環境神学においては、Ｊ資料的な視点が様々な仕方で現れている。
　ジョン・ムーアとアルド・レオポルド（土地倫理）／ヴァンデル・ベリーとヴェス・ジャクソンのアメリカの農夫の経験に基づく議論／ジョン・カブとリューサー
・以上の諸思想家では、「キリスト教における最も一般的な遺産」が見られると同時に、よりヤハウィスト的農業的な人間理解に基づく人間の使命観が共有されている。
４．人間の使命の再構築（pp.149-151）
・これまでの議論の確認。
・キリスト教的伝統における人間の使命のイメージは、古代の特定の社会集団の自己理解を反映している。それはこうしたイメージを現代の状況に適応する際の限界という面をもつ。しかし、新たな可能性へ寄与するものとなるかもしれない。
・キリスト教的伝統は一枚岩ではない。異なる人間理解の視点が含まれ、それは全体として、人間の現実存在の逆説的状況を捉えており、これら二つを保持することが望ましいと思われる。
・身体的な存在としての人間にとっての、農業の意義。（これについては、アーレントの『人間の条件』という論点が参照されるべきであろう。）

（３）聖書の終末論と環境

A．キャサリン・ケラー

５．キャサリン・ケラー(Catherine Keller)の「もはや海はない―終末のカオスの喪失」(No More Sea: The Lost Chaos of the Eschaton. pp.183-198)の問題提起の意義。
　この論文（エッセイ・随想）は、冒頭引用のリュス・イリラガイの文章における、水・海のイメージに導かれて展開される。問題は、キリスト教終末論がエコロジーの視点からいかに評価され、また終末論をエコロジーの視点から再生するにはいかなる議論が必要になるか、ということである。
６．キリスト教における tehom（深み・海、カオス）恐怖症(tehomophobia)
・ケラーがまず注目するのは、ヨハネ黙示録 21:1-4 の「もはや海もなくなった」として描かれる終末のヴィジョンである。ここで描かれる「希望」は、自然の救済（自然を救済すること）ではなく、自然からの救済になってしまっている。これは、エコロジーに共感的なキリスト教思想家、例えばモルトマンなども免れていない問題である。つまり、フェミニスト神学によって批判される「他界的な終末論」(otherworldly eschatology)によって、歴史的地上的なヘブライ的信仰がはかないものと死からの逃避の空想に転化されているという問題である(185)。海は神話的なカオス、邪悪な怪物として描かれ、新しい創造はこの海の蒸発を含むことになる。

・このヴィジョン（黙示録的なカオス・海の殺戮）は、現代の現実の海の姿である(186)。
・ヨハネ黙示録で生き生きと描かれる海は、経済的不平等（古代地中海世界のグローバルな海運・交易のもたらす富と搾取）と環境破壊が手を携えて進行する領域であるが、その背後には、古代バビロニアの神話伝統が存在する（ティアマトとマルドゥク）
・問題（構築的神学からの）：深みをデーモン化することもあるいは抹殺することもないようなカオス愛好的な(tehomophilic)キリスト教的希望はあり得るのか。
７．カオスをめぐる二つの伝統
・創世記１章の「カオス」から「無からの創造」論へ。カオスの無化。これが、乾いたエスカトン（苦難と死の解決）のイメージに対応する。ヨハネ黙示録の潜在的な可能性もかかわらず、「地球の多システム的な環境社会的不正義に対する人間の説明責任は、不死性への復活への究極的希望に飲み込まれてしまっている」(188)。ケラーは、続いて、エイレナイオスらの古代教父による「グノーシス的女性創造者」の拒否を取り上げ、コロンブスの失われた地上楽園の「発見」へと話を進めて行く。
・聖書には、カオスについての別の伝統が存在する。ヨブ記。嵐・つむじ風の中より呼ばわる神が語るベヘモット、そしてレビヤタンの人間に対する優位（レビヤタン賛歌）。「人間の横暴な経済などは、深み（自然全体を包括する激しいエネルギー）の神話的具象化であるレビヤタン前では滑稽に見える」、「人間の力という妄想」(190)。ケラーはこのヨブ記的な知恵を近代アメリカ文学へとつないで行く。自由と力における壮大さで描かれた「白鯨」のモービ・ディック。エイハブ船長は、カルヴィニズム的資本主義の縁を航海する。
８．環境・体系的な神学（An ecosystemic theology）の課題：「終末論を反復したり斥けたりするのではなく、それを再利用し根拠付け深めること」(192)
・この課題は容易ではない。テキストの表層(surface)に戯れる多くの現代思想は、カオス的な意義を乾燥させ言述語を非自然化し、自然への指示をすべて文化に置き換えるのに忙しい。
・表層と深みの二元論。最後のフロンティアとしての海へのダメージは、深く思惟し感じ行為する文化的能力へのダメージとなる。有限性と死からの逃亡は、私たちを自らの深みから遠ざけ続ける。カオス恐怖症的な偏見の支配。問題は秩序自体ではなく、カオスを消去する秩序である。
９．現代のカオス理論を参照すること(193-195)。
10．まとめ：「もはや終わりは見えない」
・深みは終わることがなく、人間という傲慢な種による暴力的な消滅に抗し、多くの種を生み出しいる。より大きな複雑性、経験の豊かさに向けて。生物種の多様性と文化的な多様性を保持するという限りなき愛。
・聖書とエコロジーとの間の結びつきを顕わにすること。我々の多形的なセクシュアリティとエスニシティといった文脈と共鳴する多くの事柄を参照しつつ。差異。
・理論と実践との相互依存性。アカデミーや教会の隙間へ住み着くこと。

B.バーバラ・ロッシング(Barbara R. Rossing)「新しいエルサレムにおける生命の川：地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

11．ロッシング：シカゴのルター派神学校の新約学の教授、ヨハネ黙示論解釈の専門家。
The Rapture Exposed. The Mesaage of Hope in the Book of Revelation, Basic Books, 2004.
http://www.lstc.edu/about/faculty/barbara-rossing/
　この論文で、ロッシングは、一つ前に収録されたケラーの論文と同様に、ヨハネ黙示録を環境論の問題連関で論じているが、ケラーが宗教学的構築神学的アプローチをしているのに対して、典型的に聖書学的なアプローチを行っている。
12．ロッシングの問題意識は、ケラーなどにおいて見られるように、黙示録を非環境論的であると解釈する（黙示録への懐疑論）のとは別の解釈の可能性、むしろ、ヨハネ黙示

録を環境論者でフェミニストの新約聖書学者として積極的に読解することを目指している。この点で、まさにケラーとは対照的であり、両者の議論を読み比べることが有益と思われる。「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」(207)

3．そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。小アジアの「都市のキリスト教徒」(urban　Christian)宛という文脈がこの議論に関連している。また、ロッシングは、ディーター・ゲオロギ(Dieter　Georgi)の研究に依拠している。

・ローマ帝国の「現実化した終末論」(永遠のローマ、ローマの平和)。

　ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。

・都市の女性的形姿（人格化）による描写。「その主要な論争は、政治的で経済的であり、性差に関わるものではない。」(209)

・バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。

　「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている。」(209)

　「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」

・森林伐採、「裸の荒れ地」(17:16) エレモオー、ギュムネーン

　68-70 年のユダヤ戦争についてのヨセフスの証言。ローマは征服された土地を森林伐採した。グローバルな森林伐採。帝国主義と不正義への批判。

・バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)

　ケラーの指摘するような「神話論的な恐れ」は、黙示録にとって、海の主要な批判ではない。「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」

　「もはや海はない」＝「ローマの貨物船と交易の終わり」

別の経済的ヴィジョン

・新しいエルサレム：生命の都

新しいエルサレムは環境論的。

　「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」(214)

・地上における神の家、都市生活のヴィジョン。スケネ

　地上からの脱出（携挙）ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。都市的ミニストリの新しいヴィジョン

・贈与的経済（a gift economy）

　生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージを与えることへの預言者的な批判

・エゼキエルの新しい神殿のヴィションの拡張。

・諸民族の癒やし。創世記 3:22 の禁止命令を克服する生命の木のヴィジョン。

　都市と田舎の和解

・新しいエルサレムは未来のためのヴィジョンである。

　「わたしたちは、よりよい近隣、聖なる都を描きながら希望を持ち続けねばならない。」(219)

＜問題＞

1．メタファー・モデル、ヴィジョンへの注目　→　構想力と人間存在

2．個と共同体とをつなぐ理論はいかにして可能か？　社会的構想力、ヴィジョンの共有とは？

3．テキストの読解に即して。聖書読解の新しい形。